

葛飾北斎と便々館湖鯉鮒 (三)

—— 『画本 山満多山』を中心にして (中) ——

浅岡修一

はじめに

これまで『北斎研究所研究紀要 第一〇集』では「葛飾北斎と便々館湖鯉鮒」と題して便々館湖鯉鮒の狂歌活動について記述し、続く『北斎研究所研究紀要 第一一集』では彼が関し、序文を書いた『画本 山満多山』上冊における、狂歌と葛飾北斎の挿絵について紹介した。本集では、引き続き『画本 山満多山』中冊の北斎挿絵と掲載の狂歌について紹介する。

(四) 『画本 山満多山』中冊の北斎作品と狂歌

『画本 山満多山』中冊に描かれている北斎挿絵の画題と、そこに添えられている狂歌作品及び狂歌作者は、次の通りである。

(※数字は、上冊からの作品の通し番号)

12 駒塚橋

古川亭青峽

(44) 此ほとりミすくさおほミこまつかのはし柱さへふとくたくまし

13 大木戸

酒蔵人

(45) 玉川の水のきほひや大木戸を通りものなる夕立の雨

狂題好見

(46) 大木戸にしハし休らふあゆ籠の月をおとろかす夕たちの雨

田子藤丸

(47) 大木戸につなきし馬のせをわけて骨まで濡る、ゆふ立の雨

14 愛宕山

孝志亭物成

(48) 御夢想の吞ほ、つきも及まし只一口に風の涼しさ

佐吾齋集丸

(49) 愛宕山茶やの火入ハきゆるともおきを吹くるかせのす、しさ

遊、館花面

(50) 夏ならてあたこの山の花こさをさくら川迄ちらすす、しさ

染紫楼勇成

(51) 夕くれハ愛宕の山のかくよりもこたちにうける風の涼しさ

玉光舎占正

(52) かはらけハミえぬ愛宕の山風もなけぬ所かす、しかりける

15 祇園會

(53) すさのをのミこし祭ときくからハいなたを酒の肴にやせん
玉鉾軒行就

五常猶道

(54) あんまさへ通りきられす天王の夜宮ハ人に人のもまれて

冬毛城木

(55) 祇園會のさしきへ屏風たつミなる其かたよミや貴せんくんしゆす
壽恵閑人

壽恵閑人

(56) きをん會を江戸紫にうつし画ハ都のあけをうはふ玉垣

蔓亭糸瓜

(57) 蜀江の錦ひらつく祇をん會にさハれと鳴ぬにハとりの鉾

16 内藤新宿

竹葉亭真影

(58) 馬にかへあやめにかへて此駅の空にも牛をひきし七夕

上書此主

(59) 七夕の一夜をこゝに留女行かふ人の袖をひこほし

三芳野花人

(60) たなハたの宵からかけた新宿に行かさゝきはしもの軒

和哥水喜芳

(61) 旅人のくへきのきはへさゝかにもねかひのいとをかける星合

酔風亭綾鶴

(62) ひらうしハのりかへもせずふたこゝろ内藤宿に馬ハ有れとも

17 目白山

屏風裏形

(63) 目白山同し詠とおもほへす月ハ大小不動明王

福壽窓梅人

(64) めしろ山くまなき月に水車廻るもおしき秋の中元

花永女

(65) 馬白山只しろくゝと月のかけさしわたしてや目のとゝくたけ

千代古道

(66) 鳥の名の目白ときゝて秋の夜によくもさしたるもち月のかけ

東森氏

(67) 肴にハ鯛のはまやきほしかれいつれ目白は月のミところ

18 穴八幡

東夷菴古渡

(68) 魚鳥のはなし序にこよひこそ聞はや月も出現の洞

器圓住

(69) 引しほる弓矢かミとて鳥一羽ふとはなしたる秋の中元

甲斐白根

(70) さやかなるこよひの月にはなすらしあな八幡の穴うさきまで

鳴羽搔

(71) 深かりし元八まんのめくミをハしらぬひとにもいさはなしとり

破風裏甲

(72) かけ頼むこよひそ月のひかり松放つ雀も千代とうたひて

19 関口

都喜世寿住

(73) 田の面ハ基盤とミえて関口に中手おく手もかけて二たん

得意数廣

(74) かり出す猪のしゝなして関口にほしてきはミる稲もいさまし

榎陰法師

(75) おくてかる時ハこゝろもせき口にくれて夜なへをかけし干稲

大丈夫蔵吉

(76) 秋の方稲に向つて田かりよし木のえにまでも干せし関口

三組下吉

(77) 関口の何俵とりとそろはんにわつてかけたる賤か干稲

20 山王

(78) 七夕のほしの山かやかさゝきの橋ともミえすわたる初雁

小桶高積

(79) はつ雁ハ祭りのころをひきかへてミこし路よりやわたる山王の山

紀節人

(80) 山王にまつりハもはやすみぬれとミこし路よりやわたるかりかね

21 十二社

(81) 里の名の十二社より十二銅初穂のすゝき神に手向けん

石美真志

(82) 十二社こゝハ熊野のうつしそと其きに成つてさく女郎花

蕎麦好也

(83) 十二社こゝに熊野の烏瓜松と杉との枝にやとれる

秋田舍莉穂

(84) 今日ゑとの其十二社のそこ爰と風に首ふる虎の尾の花

22 聖堂

(85) はゝをきの文せん王やまき給ふ此聖堂のむねあけのころ

秋衣太

(86) ともし灯にあかるゝ文や学ふらん雪もほたるもいらぬうてなに

常盤里繁

(五) 狂歌に詠まれた江戸の景勝地——北斎の挿絵に沿つて——

〔画本 山満多山〕（以下『山満多山』中冊には、一一の北斎作品と、そこに添えられている四三首の狂歌が載せられている。ここでは、北斎の描いた江戸の「勝地」（湖鯉鮒の序文）と、そこに添えられている狂歌について紹介したい。

紹介したい。

（※数字は、「上冊」からの狂歌作品の通し番号）

12 駒塚橋〔写真十六〕

「駒塚橋」には、駒塚橋を渡る二人の婦人とその従者と思われる男性が描かれている。雨上がりなのだろうか。かんざしに手を添えている真ん中の婦人は、つぼめた雨傘を掲げている。男性は腰を屈めて、草鞋の紐を結び直している。

「駒塚橋」は、「駒留橋」のことである。「駒留橋」の名称の由来は、古歌によるといわれている。『江戸名所図会』には、次のように記されている。⁽¹⁾

龍隠庵の前、上水の流に架す。此水流は神田の上水なれど、玉川の分水の落合にして、山吹の里に傍ひて流るゝ故に

駒とめて猶水かはん山吹の花の露そふ井出の玉川



〔写真十六〕「駒塚橋」(『本歌山満多山』)
(国立国会図書館蔵)

といへる古詠の意をもて号けるとぞ。

「此ほとり」(44)は、駒塚橋の「はし柱」(橋桁を支える柱)の強さを詠んでいる。駒塚橋の下を流れる川の水際には、「ミすくさ(水草)」が生い茂っている。「はし柱」の強さを「ふとく」「たくまし」と、重ねて表現することによって、強調している。

13 大木戸〔写真十七〕

「大木戸」には、急な夕立に遭って、慌てて大木戸を通り過ぎようとする五人が描かれている。頭を覆った被り物が全て異なっており、衣類を被った女、両手で笠を持った駆け足の二本差し男、寄り添って一つの雨傘に入っている男女。合羽で全身を包んだ草鞋を履いた男。夕立の激しさを、左上から右下にかけて斜めの直線を描くことによって、表している。

「大木戸」は、近世になって街道が都市に入る所に設けられた、簡単な



〔写真十七〕「大木戸」(『本歌山満多山』)(国立国会図書館蔵)

関門である。この挿絵は、「四谷大木戸」だと思われる。『江戸名所図会』には、次のように記されている。

甲州及び青梅への街道なり。土俗云ふ、霞ヶ関或は旭ノ関とも云ふと